

SHOW HEY シネマルーム



Data

監督：御徒町帆
原作：小嵐九八郎『真幸くあらば』
(講談社刊)
出演：尾野真千子/久保田将至/佐
野史郎/ミッキー・カーチス
/テリー伊藤/YOU T
HE ROCK

👁️👁️ みどころ

死刑囚と面会人との心の交流と純愛を描いた名作はキム・ギドク監督の『ブレス』(07年)をはじめ数多いが、ここに更なる一本が追加。音楽監督森山直太朗作曲の静かなピアノ曲が流れる中で展開される、婚約者を殺された女と死刑囚との心の交流とは？

なぜ2人の間に、究極の愛、禁断の恋が生まれたの？そして、手を触れ合うことさえできない2人の性愛の発露は？万葉集と有間皇子。そこに出典をもつタイトルの読み方を含めて、深く静かに検討したい。

* * * * *

このタイトルはどう読むの？その出典は？

国語力や漢字力が著しく低下した今のニッポン国では、本作のタイトルを「まさきくあらば」と正確に読める人はほとんどいないのでは？かく言う私も実はこれを読めなかったうえ、意味も全くわからなかった。原作は作家であり歌人でもある小嵐九八郎の小説『真幸くあらば』だが、さてそのタイトルの出典は？

それは、私もその名前だけはよく知っている有間皇子が詠んだ万葉集巻第二・一四一に載っている「磐代の 浜松が枝を 引き結び 真幸くあらば また還り見む」という歌らしい。ところが、またこの歌の解釈が難しい。『小説現代』に連載しはじめてからほぼ12年半、講談社から単行本になって11年が経つというそんな原作にプロデューサーの奥山和由が目じたのはいいが、本作を広く知ってもらうためには、丁寧にそんなタイトルの説明をする必要があるのでは？

死刑囚と面会人との心の交流を描く新たな作品が

死刑囚と面会人の心の交流を描いた映画は、韓国ではキム・ギドク監督の『プレス』(07年)(『シネマルーム19』61頁参照)、ソン・ヘソン監督の『私たちの幸せな時間』(06年)(『シネマルーム13』99頁参照)、邦画では万田邦敏監督の『接吻』(06年)(『シネマルーム20』126頁参照)などがあるが、いずれも私の評価は高く、星5つ、星4つ、星4つ。『プレス』はテレビで見た死刑囚の自殺未遂報道に一人の主婦が興味を持ち、面会の中で死刑囚に春夏秋冬を届けるもので、『私たちの幸せな時間』は自殺志望の女が毎週死刑囚の面会にやってくるものだった。そして『接吻』はテレビで見た死刑囚の意味シな笑顔に孤独なOLが惹かれ、獄中結婚をするものだった。

そんな死刑囚と面会人との心の交流をテーマとした新たな本作は、遊ぶ金欲しさに空き巣に入った家で、居合わせたカップルを殺してしまった青年・南木野淳(久保田将至)が一方の主人公。そして、もう一方の主人公が淳によって婚約者を殺された女性・川原薫(尾野真千子)だ。しかして、なぜ薫は死刑囚となった淳の養母となり、淳に対して面会を求めてくるの? そんな設定は、謀反の咎で捕まえられ、死刑を間近に控えた有間皇子が詠んだ前述の歌に着想を得たものだが、さてそこまでわかる人はどれくらいいるの?

「究極の愛」「禁断の恋」の動機がイマイチ?

私がかつての限りで本作誕生の内幕をバラせば、スタッフとキャストがすべて決定した後、プロデューサーの奥山和由と当初予定されていた監督の意見が対立し、監督降板劇があったらしい。その後奥山和由から白羽の矢が立ち監督をつとめたのが、本作で音楽監督をつとめた森山直太郎に対してほとんどの楽曲の歌詞を共作してきた詩人の御徒町胤。「死刑制度について問題提起をするためにはっきりとした残酷さを出したい」と主張する監督を降板させてまで、本作で奥山和由が追及したかったのは、「究極の愛」「禁断の恋」らしい。

森山直太郎作曲の静かなピアノ曲が流れる中で展開される、絶対触れ合うことのできない薫と淳の心のつながりが生まれたのは面会時に手渡す聖書への書き込みによるもの。もちろんこれは違法だが、映画だからそれは大目にみても、わずかな言葉の書き込みだけでホントに互いの愛が芽生え、「究極の愛」「禁断の恋」が実現するの? 死刑判決を受けた淳が弁護士(佐野史郎)の意見を無視して控訴を取り下げ死刑を確定させてしまったのはなぜ? 淳の殺人行為によって婚約者が自分を裏切り他の女と肉体関係にあったことがわかった薫は、なぜ淳の裁判に興味を示し死刑判決後面会可能とするため淳の養母になったの? 淡々と進行していく本作からそれをどう読み解くかは難しい。聖書への書き込みを通じた互いの告白による心の通じ合い、そして下着姿の写真的差し入れによる淳の肉体的欲望の広がりなどは十分理解できるが、それがなぜ「究極の愛」「禁断の恋」まで発展していくの? そこらあたりが私にはイマイチだが、さてあなたは?

接吻、肉体関係に続いて本作では?

小池栄子が独特の存在感を示した『接吻』では、異例の設定の中で実現した面会人と死刑囚との接吻がクライマックスの事件を引き起こした。また、『プレス』では監視カメラの

モニターを覗いている保安課長がキム・ギドク監督自身だったから(？)死刑囚と面会人が肉体をむさぼり合う衝撃のシーンが実現した。しかし本作では？

薫を演じたのは河瀬直美監督の『殞の森』(07年)で主演した尾野真千子だが、じっくり観てみると彼女はかなりの美人。しかも本作のプレスシートには、そんな彼女の悩ましいヌード姿が載っているからこりゃ一体どんな場面で、という期待が高まってくる。

猿はマスターベーションを覚えると死ぬまでそれをくり返すらしいが、人間は別。また、人間のセックスの快感は性器の接触から生じるものではなく、脳から生まれるものらしい。ちなみにプレスシートの中で脳科学者の茂木健一郎氏は本作を「あなたの脳内純愛が、ここから始まる」と称しているが、それを私流に本作に即してもっとはっきり言えば、セックスの快感は脳内想像から生まれる、ということだ。さて接吻、肉体関係に続いて本作が描く「究極の愛」「禁断の恋」のクライマックスとは？

死刑囚あれこれ、死刑囚と看守の心のふれあいあれこれ

死刑判決が確定した死刑囚が、死刑執行までに過ごす時間はどんなもの？それを描いた映画は洋画では『カポーティ』(05年)(『シネマルーム11』350頁参照)や『ライフ・オブ・デビット・ゲイル』(03年)(『シネマルーム3』169頁参照)等があり、邦画では『私は貝になりたい』(08年)(『シネマルーム21』208頁参照)や『13階段』(03年)(『シネマルーム2』220頁参照)などがある。本作でもある死刑囚は10年以上独房に入っていたが、そんな事態が起きるのは、日本では死刑の執行は「判決確定の日から六箇月以内にこれをしなければならぬ」と刑事訴訟法475条が規定しているにもかかわらず、死刑執行の命令を下すべき法務大臣の思想・信条によってこの法律(条文)が事実上無視されているためだ。そんな日本国における現状をふまえて本作では、テリー伊藤、ミッキー・カーチス、YOU THE ROCK という3人の俳優が演じる個性的な(?)死刑囚が登場する。生きることに意味を失ったために淳は控訴を取り下げて死刑判決確定の道を選んだが、それに対する先輩死刑囚たちの意見は？本作では、そんな「死刑囚あれこれ」もしっかり検討したい。

また、死刑囚と看守との心の繋がりを描いた映画は、洋画では『グリーン・マイル』(99年)、邦画では『休暇』(07年)が代表だが、本作では絵を描くのが上手な淳に対して何かと気配りをしてくれる気のいい看守が登場する。そんな「死刑囚と看守の心のふれあいあれこれ」も本作ではしっかり検討したい。

2009(平成21)年11月26日記